

a f t e r h o u r s

『ポピュラー音楽研究』の第4号をお手元にお届けできることになった。今号はとりわけ、過去の遅れを取り戻し、やっと本来のペースに戻すことができたのが嬉しい。関係者のご尽力、ならびに会員諸兄姉の支援のたまものと感謝する。

音楽という感性的な対象を、文字の集積である論文によって追いかけることの歯がゆさやいらだたしさを、書き手も読み手もきっとときどき感じるのではないだろうか。世の中の多くの人びとにとっては、音楽は演奏するもの、歌うもの、そして聴くものであり、文字（ましてや論文）は必要ない。けれども、音楽がいったん、もっと大きな文脈のなかに置かれて、音楽以外のものと関係し、音楽としてあることの意味を問われるとなると、音楽を音楽の外から意味づける方法、すなわち文字は不可欠となる。音楽産業しかり、音楽教育しかり、音楽政策しかり、音楽美学しかり、音楽の歴史しかり。

音楽研究も、そうしたもののひとつである。そしてこれらが、音楽の世界に、より豊かな可能性を開いていくものであると期待しよう。

ますます多くの投稿が寄せられますように。

(橋爪大三郎)

提言

まともな政府のつくりかた

橋爪大三郎 (はしづめ だいさぶろう・東京工業大学教授)

日本の政治はどうしようもない状態だが、ただ嘆くばかりではしょうがない。その原因をとことん考えてみたほうがいい。

この10年、リーダーの資質がない人物が、つぎつぎ首相に選ばれた。森喜朗氏が首相になったのは、まさしく、彼が無能だ（操縦しやすい）と思われたからである。

ではなぜ、無能な首相が選ばれるのか。

それは自民党の派閥力学にもとづく。自民党が選出する総裁は、そのまま国会で首相の指名を受ける。憲法の建て前は議院内閣制だが、その実態は、自民党内閣制だ。自民党の過半数をおさえれば、自民党が国会の過半数をおさえるから政権を担当できる。

自民党にはだいたい5つぐらいの派閥グループがある。そのうち3つの派閥が主流派を構成する。主流派のうち首相候補を出さない2派閥は、無能な人物を首相に担ぐほうが自派の影響力を発揮できる。派閥の幹部たちも同じように考えるから、派閥のトップにもしばしば無難（無能）な人物がすえられている。

政治をよくする第一歩は、国民が、すぐれたリーダーを首相に選ぶことである。政権を担う二大政党が、首相候補を党首に立てて総選挙を戦う。国民はそれをみて投票し、つぎの政権が成立する。これが議院内閣制の予想する民主主義のルールだ。ところが自民党内閣制では、凡庸な人物が選ばれ、国民は手が出せない。連立時代になっても、派閥が増えたようなもので、力学は変わらなかった。

それなら、何が必要かとてもはっきりしている。

いちばん簡単なのは、自民党が制度改革をすることだ。すぐれた資質と指導力がなければ、自民党のリーダーになれない仕組みをつくる。総裁公選は定着しなかったが、狙いはよかった。アメリカの大統領予備選みたいな仕組みをつくり、凡庸な政治家はふるい落とされてしまう長丁場の政策論争レースを行なうとよい。

自民党が改革をする気がなければ、国民が野党に投票し、政権を交代させることである。いまの野党は頼りないが、よほど頑張って自民党より先に自己改革してもらおう。

さもなければ議院内閣制をやめて、首相公選にするのも一案だ。憲法を改正して、内閣（政府）と議会の役割を定義しなおす。

大仕事だが、どれかをや（らせ）ると国民が覚悟することである。

2002 Column [40人のメッセージ]

橋爪大三郎

東京工業大学教授

すべてのスポーツには、禁則(ルール)がつきもの。ルールを守らなければ競技は成り立たず、むき出しの戦いになる。ルールを守って行なう競技は、友好(むき出しの戦いではないという約束)の表明だ。

サッカーのルールは単純で、人間の本能に訴える。しかもイングランド対ウェールズなど、地域対立の記憶をはらむ。フリーガンのむき出しの暴力とも背中あわせ。日韓両国が共催を友好的にやりとげるか、世界が注視している。

OPINION

役割の再考

東京工業大学 教授(社会学)
橋爪大三郎
Daisaburo Hashizume

役割とは何か。

社会学者タルコット・パーソンズは「相互行為の安定したパターン」と言う。相手に対する予期が成り立ち、相互行為が安定するのが役割の特徴である。決まった役割があると、たまには違うことをしたくなるのが人間だが、そうはいかない。その人はその役割に応じた行動をするものと周囲から期待され、そこから外れにくくなるからだ。自分にとつては負担となつても、相手の行動を予測できるのが役割のメリットだ。ある程度コストを分担し合い、自由を犠牲にして互いを縛る——役割には、社会的行為を円滑に進めるという作用がある。

役割が特別なかたちを成したものととして、官僚制が挙げられる。官僚制とは、ある特定の目的のために、権限と責任が明確に分化し、機械のように動いていく組織をいう。部長・課長などの職階がある、文書で仕事をし、出社・退社時間が明確など、官庁や企業はみなそうである。マックス・ウェーバーは、「近代社会は官僚制化する」と述べている。

企業が官僚制化するのには、市場がその正反對だからだ。市場は自由で、安定した社会関係がない。ここでは、消費者がより品質のよいもの、安いものを求めるため、競争が起き、企業の信用が問われる。「あの会社の製品なら大丈夫」という消費者の信頼があれば、市場で安定的に商品売ることができると、企業は厳しい品質管理を行うが、それには人

間の管理が必要。ゆえに官僚制が発達する。

官僚制は同じ事務の繰り返しには向いているが、突発的な状況には対処できない。高度経済成長期の護送船団方式によって、日本企業は官僚制に固まっていた。組織に働く人々も、それに適合しすぎてしまった。

人は、家庭や地域社会などいくつも役割があつてようやくバランスする。さもないと、役割が人格に焼きつき、会社なしには生きられない人間になってしまう。無意識のうちに、相手の行動や市場が予測できると思うまでになる。現実には気まぐれな消費者や若手の不可解な行動に当惑するばかりで、苦しむことになる。

役割に依存しすぎて思考までパターン化してしまうと、健全な批判もできなくなる。批判には、まず相手の言うことを一〇〇%信じる素直さが必要だ。一度相手に同化して考え、初めてその矛盾に気づく。それを言葉にして質問し、ようやく批判のかたちになる。健全な批判のない組織がどうなるかは、言うまでもない。

人間が互いを支え合う場所は、カネを介さないコミュニティであり、その一角にカネを介する市場がある。市場があつて企業は存在する。この順番を忘れてはならない。企業がなくなると人は生きていけない。人格から役割をいつでもはがせるよう、いろいろな役割を担うことが自立した個人につながる。

エホバの神VS.アツラーの神

今回はいつもとちよつと違います。書評とか本の紹介とかではない。ぼくが自分で勉強してみたかった。ただそれだけです。テキストは橋爪大三郎さんの『世界がわかる宗教社会学入門』（筑摩書房）を使いました。

もちろん勉強の対象は宗教です。いったいぜんたいなんで宗教の勉強なのか。それはもちろんいわゆる「同時多発テロ」のせいです。あの日以来、テレビはずつとニューヨークとワシントンとアフガニスタンとバキスタンのことばかり放送しています。アルカイダがどうの、とか、後方支援がどうの、とか。中東専門家やら元グリーンベレーやら軍事専門家がかけもちで出演して喜々としてしゃべっている。でも、なんか変。釈然としない。よくわからない。もっと困ったことにながわからないのかもわからない。そこでとにかくぼくは宗教のことを勉強してみたいと思ったのでした。

いちばん最初のガイダンスのところを読んだだけで、まず驚きました。みなさんは知ってましたか。ぼくは

知っていた……と断言できません。知っていた、ような気もするし、あるいはなんとなくそう感じていただけなのかも、という感じです。なん

くなるのが人情ですよ。ところが、「それは、お間違ひ。神が、三人いるわけではありません。エホバとはJehovah（ありてある者）という意味で、名前ではない。アツラーも「神」という普通名詞で、名前でない。一神教では神は一人だけなので、名前が必要なのです。つぎに、この三つの神は同一人物。エホバ＝父なる

退屈な読書

330



高橋源二郎

イラスト・題字：しりあがり寿

のことか？ つまり、キリスト教の神なんです。天にまします我らの父」ですね。それは知ってる。それからイスラム教の神は？ アツラーの神。そうです。じゃあ、ユダヤ教の神は？ エホバの神。当たり。では、この三人、いや三神の関係は？ みんな一神教だから、本当の神の位置を巡って争っている——と言いた

神はアツラーなのです。このことは、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒にも十分意識されています。知らないのは日本人だけです。するとですね、アルカイダのスポークスマンやビンラディンさんが「アツラーの神に栄えあれ」と言ったり、アメリカの人たちが「ゴッド・ブレス・アメリカ」と歌ったりして

いるのだがそれは同じ神さまのことを言っているのだということになる。どうなっているのか。いや、神さま自身はこの問題についてどのようにお考えになっているのだろうか。G7とかG8とかいって、大統領や首相が集まっているいろいろなことを話し合うらしいが、そんなことより神さまに三人（？）集まってもらってテロ問題を話し合ってもらおうG3の方が重要ではないだろうか。そんなことを考えながら、ぼくは橋爪さんの本のイスラム教のパートを読んでいた。いや、恥ずかしいことはもつとたくさんあった。死んだらどうなるのか？ というコーナー。「死後の世界のことを考えるのが宗教だと、日本人は思っているようです」と橋爪さんは書いています。あつ、ぼくもそうだ。実はそうではなかったみたいなのです。

キリスト教は「最後の審判の日に、死者も全員復活して、裁きを受ける」だからそれまで「死者は墓地でねて待っている」だけだそうです。「イスラム教もだいたい同じ。ユダヤ教はというと「死ねば土くれになつてしまふ」から「死者などは存在しない」。木村太郎も戦争の話はいいからこういうことを言ってくれないか。言ってくれんよな。

アンケート

今年の執筆予定

延着分

◎ 橋爪大三郎

社会学

現在 在準備中の仕事は、『平成じゃな
いか体宣言』（メタローグ）、『は
じめての言語ゲーム』（講談社）、中国
論集、書評集、『ポスト戦後の正統論』
（勁草書房）、などです。順調に、執
筆・刊行できるとよいのですが。